

第42回 中区明るい選挙推進作文コンクール

入

賞

作

品

集



中区明るい選挙推進協議会



第42回 中区明るい選挙推進作文コンクール



「中区明るい選挙推進作文コンクール」は、大切な選挙や、選挙につながる「まちづくり」をテーマとした作文を夏休みの課題として区内在住在学の小・中学生から募集し、政治や社会の仕組みに関心を持ってもらうとともに、選挙に関する意識を社会的にも高めることを目的として、毎年開催しています。

今年度は、小学生A部門(1～3年生)に252作品、小学生B部門(4～6年生)に323作品、中学生部門に138作品、合計713作品もの応募が寄せられました。応募作品は、区内小・中学校教諭、中区明るい選挙推進協議会会長、中区選挙管理委員会委員長、中区长により審査され、各部門において金賞1名、銀賞2名、銅賞3名、合計18の優秀作品が選ばれました。

■小学生A部門(1～3年生)

テーマ 「わたしのまちのすきなところ」

■小学生B部門(4～6年生)

テーマ 「より良いまちをつくるために私たちにできること」

■中学生部門

テーマ 「選挙について考える」



入賞作品は中区役所ホームページにも掲載しています

<https://www.city.yokohama.lg.jp/naka/kusei/shikai-senkyo/keihatsu/>

目次

― 小学生A部門（一～三年生） ―

・金賞（中区長賞）

ぴかぴかひかるおひさまがみえるばしよ

みなとみらい本町小学校 一年 松本 絢佳 … 1

・銀賞

わたしをそだててくれる大好きな町 本町小学校 二年 佐々木 天音 … 2

かん声わき上がるハマスタ 立野小学校 三年 中澤 晴香 … 3

・銅賞

思い出のつまった駅 立野小学校 三年 磯部 宇乃 … 4

たくさん公園にかこまれた町「山手」

立野小学校 三年 上田 沙耶 … 5

絵本のまち 本町小学校 一年 高松 希羽 … 6

― 小学生B部門（四～六年生） ―

・金賞（中区選挙管理委員会委員長賞）

人間と猫が共存するために 大鳥小学校 六年 藤本 凜 … 7

・銀賞

健康寿命と社交ダンス 本町小学校 六年 佐藤 舞音 … 8

ヤングゲアラームーしよにくらす

横浜雙葉小学校 四年 山岡 こと葉 … 9

・銅賞

山元町のかっこいい大人たち 立野小学校 六年 宮崎 圭祐 … 10

言葉とあいさつの力 立野小学校 五年 村岡 燦 … 11

本当のバリアフリーを目指して。 立野小学校 六年 鈴木 太緒 … 12

― 中学生部門 ―

・金賞（中区明るい選挙推進協議会会長賞）

大事な一人一人の意見、一人一人の一票 仲尾台中学校 一年 清水川 智絵 … 13

・銀賞

選挙で築く私たちの未来 仲尾台中学校 一年 藤井 菜月 … 14

投票率を上げるためには 仲尾台中学校 一年 村上 ゆりあ … 15

・銅賞

若年層の投票率について 仲尾台中学校 一年 加藤 りこ … 16

過去から未来へ紡がれていく選挙のリレ―

大鳥中学校 三年 古庄 龍空 … 17

より生きやすい未来を願って。 仲尾台中学校 一年 小泉 詩花 … 18

小学生A部門

☆☆☆ 金賞（中区長賞） ☆☆☆

「ぴかぴかひかるおひさまがみえるばしょ」

みなとみらい本町小学校 一年 松本 絢佳



わたしのすきなばしょは、赤レンガちかくのひろばです。わたしは、二年まえに、よこはまへひっこしてきました。おかあさんが、日の出をみにいこう、といいました。あさはやくおきるのはにがてだったけれども、いつしよにいくことにしました。あさじてんしゃで、赤レンガちかくのうみべにつきました。さいしよは、くもがすこしあつて日の出がみえるかわからなくてふあんでしたが、すこしじかんがたつとくもがすくなくなつてきて、すこしずつあかるくなつてきました。すると、うみからおひさまがキラキラとかがやくように出てきました。おひさまのひかりで、空のいろが、赤、オレンジ、きいろがまぎつているようにみえました。おひさまのえは、これまでもたくさんかいてきたけれど、ほんとうのおひさまはこんなひかりでいるんだなとおもいました。キレイなおひさまを見て、目もさめてげんきになり、こころもわくわくしてきました。ちかくにいた大きなきやくせん「あすか」もいつしよにひかつていて、とてもきれいに見えていました。おひさまがゆつくりとあがつてくるとうみの青いいろもいつもとはちがつて見えました。

かえりみち、いつものだいきなおみせであさごはんのパンをかってかえりました。いえでパンをたべながら、日の出を見ながらたべるあさごはんは、もつとおいしいかもしれないとおもいました。きれいにぴかぴかひかるおひさまをみながらたべると、きつとたのしいきもちでパンをたべられるとおもいます。

こんどまたおかあさんが日の出にさそつてくれたら、あさごはんのパンをもつて、またおなじばしょへいきたいです。赤レンガのひろばは、とてもひろくてうみがみわたせます。あさは、とてもすずしくてきもちがよいところも、わたしはすきです。つぎは、おとうさんもおこして、いつしよにいきたいとおもいます。

〈講評〉

「ぴかぴか」、「赤、オレンジ、きいろ」、「青いいろ」などの表現で、筆者の目に映った輝く太陽の光や、美しい空、青い海といった、港町である中区の情景が目に見える作品でした。この日の出を見ながら食べる朝ごはんは「たのしいきもち」で食べられる、といった想像力豊かな文章が、読者のお腹もすかせてしまいますね。

中区には海をはじめ、豊かな自然が残っています。この光景がずっと続くように、子供たちには自然を大切に、中区をもつと素敵な街にしていってほしいと思います。

☆☆☆ 銀賞 ☆☆☆

「わたしをそだててくれる大好きな町」

本町小学校 二年 佐々木 天音

「おはようございます。」

「いってらっしゃい！」

「こんにちは。」

「おかえり！。今日は、早かったね！」

私が生まれた時からすんでいるところは、イセザキモールぞいのマンションです。

小学校へのつう学ろや、お出かけの時間に、イセザキモールのお店屋さんとのあいさつは、いつのまにか当たり前のようになっていきます。スーパーマーケットのかとうさんは「学校は楽しい？」

「きゅう食は、何食べた？」など学校の出来ごとを色いろと聞いてくれて、お話しします。

やつきよくのおじさんは「大きくなったねー。」と毎回、くちぐせのように言います。

他のおきやくさんにも「こんな小さいころから知ってるんですよー。」ととくいげになります。私もなぜかうれしくて、とくい気になります。

八百屋のおじちゃんは、私が一人でおつかいに行くと、「えらいね！」と言ってごほうびにおかしをくれます。

おやさいやくだ物についても、きくといろいろおじちゃんは、教えてくれます。

おかげでおりょうりのお手つだいのおやさいを切ったりするのがたのしくて大好きです。

きよ年のけいろうの日には、いつもありがとうございます。のきもちをこめて、みんなへお手紙やにおえをわたさせてもらいました。

いつもニコニコ笑がおで見まもつてくれているイセザキの人たちが大好きで、まい日のあいさつはとても気もちがよいのです。

そのほかに、イセザキモールは、一年間イベントがもりだくさんです。ゴールドエンウィークは、パレードや大どうげいが見れます。

私はダンスのイベントにでたり、うたをききに行ったりします。夏はマンションのおく上から花火も見れます。

そのどれもがすてきな思い出です。みじかにたくさんの思いでが出来て、私はしあわせです。「ありがとう。」のかんしゃの心をこれからもちつづけたいと思います。

〈講評〉

会話で始まる書き出しは、とても印象的で、イセザキモールの温かい日常を上手に表現しています。生まれた時からの様々な商店街の方々の経験が具体的に表現され、そのお話に、筆者が確かに商店街の方々に支えられ、教えられ、育てられていることが、とてもよく伝わります。また、一年中の行事とともに、顔の見えるイセザキモールの魅力も表現されています。「ありがとう」の感謝の心を、商店街の方々と一緒に大切にしていきたいですね。

☆☆☆ 銀賞 ☆☆☆

「かん声わき上がるハマスタ」

立野小学校 三年 中澤 晴香

わたしの町のすきなところは、横浜スタジアムです。どうしてかというところ、わたしがとても小さなときから、野球を見にいっているところで、楽しい思い出がたくさんある場所だからです。

わたしは、家族みんなで横浜DeNAベイスターズをおうえんしています。ベイスターズのせん手たちは、いつもとても楽しそうにしているので、おうえんするのにもとても楽しいです。

新がたコロナウイルスがはやりはじめてからは、テレビなどを見ておうえんしていました。今年になって二年ぶりにスタジアムに行っておうえんしたら、画面ごとにおうえんするよりもずっと楽しかったです。今は、風船をとばしたり、おうえん歌を歌ったりすることはできません。それでも、はく手でおうえんしたり、手をふったり、タオルをかかげたりしておうえんすると、せん手に気持ちごとどいていような感じがしました。それに、ベイスターズが大すきな人たちがたくさん集まると、みんなでいっしょにおうえんしているので、知らない人ともなか間になったような気持ちになります。

コロナがはやる前は、ベイスターズのせん手がホームランを打ったり、チームがかったりしたときには、知らない人でも、近くににいる人とハイタッチをしたりして、みんなでよろこぶのが本当にうれしかったです。

わたしは、横浜スタジアムで横浜DeNAベイスターズをおうえんすることが、大すきです。早くコロナが落ちついて、大かんせいにつつまれた球場で、またみんなとよろこび合える日が早くもどつてくるといいなと思っています。

〈講評〉

家族みんながベイスターズを中心に楽しんでいる様子がとてもよく伝わります。また、コロナが流行してからの、ちよつと変わってしまった応援の様子や思い、さらに、コロナが流行する前のスタジアムの熱い雰囲気や丁寧な表現されています。スポーツを楽しむ思いは、コロナに関わりなくあって、「同じスタジアムにいる」ことで共有できる楽しさが伝わってきます。

早く思い切り応援できるようになるといいですね。

☆☆☆銅賞☆☆☆

「思い出のつまった駅」

立野小学校 三年 磯部 宇乃

わたしは、毎日学校がおわると、学どうへ行くために電車にのります。その時に使う山手駅は、わたしにとって大切な駅です。

二年生のころ、大事けんがおこりました。いつものように電車にのるために、駅に行きかいさつで定きけんを使おうとしました。ところが、定き入れのひもが切れていて、定きけんがなくなっていました。「電車にのれない。どうしよう。」とわたしは、なきたい気持ちになりました。少し考えたあと、ゆう気を出して、駅いんさんに相談してみることにしました。ふるえる声で「定きけんをなくしてしまいました。」と駅いんさんに話かけると、駅いんさんはわたしの名前や定き入れのとくちょうを、聞き、目てき地までの切つぷをわたしてくれました。きんちょうと、やさしい駅いんさんの声に安心して、二つぶのなみだが出てきました。この出来事家に帰ってからお母さんとお父さんに話すと、「自分で駅いんさんに伝えられてえらかったね。」とほめられました。この大事けんのおかげで、こまった時にゆう気を出してまわりの人に声をかければたすけてもらえる、ということを学びました。

わたしが毎日使う山手駅にはやさしい駅いんさんがいました。学校の友だちと分かれて一人で電車にのることは、さみしい気もちもありますが、今日の学どうで何をしようかなとワクワクする気持ちもあります。わたしにとって思い出のつまった山手駅をこれからも大切にしていきたいです。

〈講評〉

筆者にとっての大事件、毎日のいつもの生活の中で起きた事を、丁寧に順を追って思い出し、様々な自分の感情を正直に綴っています。そして、たどり着いた解決の糸口の「勇氣」と、駅員さんとのやりとりを「安心の二つぶのなみだ」と印象的に表現しています。学校生活と学童生活の二つを切り替えるような、駅での気持ちの切り替えも上手に書いています。

駅を通過しながら、成長している様子がすてきですね。

☆☆☆ 銅賞 ☆☆☆

「たくさん公園にかこまれた町「山手」」

立野小学校 三年 上田 沙耶

山手公園、かしわ葉公園、さくら公園、竹の丸公園、地ぞう坂公園、ガス山公園、ね岸森林公園、本もく山ちよう公園。私の町「山手」は自ぜんいつぱいの公園にかこまれています。入学したときからずっとコロナウイルス感せんが広がりがつづけています。友だちを家によんだり、友だちの家に遊びに行くこともできません。けど、外にある公園では風もふいていて広いから、友だちとも遊ぶことができ楽しんで時間をすごすことができます。それに、家の中でずっとすごしていると運動ぶ足になり、体にもよくありません。

私がよく行く公園はかしわ葉公園です。なぜなら、ほかの公園にはないログハウスがあるからです。感せんがひろがっているときは、しばらくの間、一部のかいが使えなくてざんねんでしたが、コロナウイルスがおさまってようやく元通りに全部のかいが遊べるようになりました。また、ブランコや鉄ぼうといったたくさん遊具もあり、ほかの友だちと会っていっしょにみんなで遊ぶことも多く、小学校、学童の次に友だちと出会う場所でもあります。二番目によく行くのは山手公園です。テントをたてて友だちと遊び、風も入ってきて気持ちいいです。ほかにも自てん車の練習をするときは、平らな場所が多いガス山公園、時間がないときは近くのさくら公園に行きます。このようにたくさん公園があつて、気分によつて行くところを自由にかえられます。

自ぜんが感じられる、花や草木の多い公園に囲まれたこの町が好きです。もし公園がなくなつてしまつたら、外で遊ぶ場所も人や鳥や虫たちが集まる場所もなくなつてしまうから、マナーよくきれいに使いつづけようと思います。

〈講評〉

まるで地図を見ているように、公園の名があふれるように出てきます。その多くの公園で、友達と楽しく遊び回る様子が目に浮かぶようです。また、コロナが流行してからの友達との遊び方の変化にも気づきながら、公園を貴重な存在と認識していることも分かります。公園ごとの魅力を描きながら、多くの公園を大切にし、きれいに管理している人達の思いにもふれています。

あたり前にある公園を、本当に大切にしないでと感じさせてくれます。

☆☆☆ 銅賞 ☆☆☆

「絵本のまち」

本町小学校 一年 高松 希羽

わたしは、本をよむことが大好きです。

お母さんから、あかちゃんきょうじつがちゅうおうとしよかんでやっていたことをおしえてもらいました。

わたしが、あかちゃんのと時からみぢかには、としよかんがあります。0さいのころからお母さんやお父さんから、まいにち絵本をよんでもらっています。たくさん絵本をよんでもらっているの、絵本のせかいは、こんなにおもしろいものなんだとすることができました。

さいきん、としよかんがさらにすきになりました。りゆうは三つあります。

一つ目は、字がたくさんよめるようになったので、よむ本のしゅるいがふえたことです。おねえさんになったみたいでとてもうれいしいです。

二つ目は、すこしまえまでは、ひとり六さつだったのが、ひとり十さつまでかかれるようになったことです。おうちで本にかこまれることは、とてもわくわくします。

三つ目は、本をしようどくするきかいがあたりしくはいったことです。わたしのうちでは、コロナがはやるまえから本をしようどくするしゅうかんがあつて大へんだつたのでとてもうれしかつたです。なんどもつかつているので、しようどくするスピードはだれにもまけません。

もつともつとしよかんをたのしくするために絵本のなつのおまつりがあつたらしいのになとかんがえたり、としよかんがおうちになつたら本がよみほうだいになるのでしあわせだとおもつたりします。こんなふうにおもうことができるようになったのは、わたしのみじかにずつとちゅうおうとしよかんがあつたからです。わたしにとってここは、絵本のまちです。ずつとずつこのまちをたいせつにしていきたいです。

〈講評〉

気づくと沢山読んでもらっていた絵本。それが自分で読めるようになる喜びが丁寧に書かれています。中央図書館との関わりあいや最近の変化が綴られ、図書館が身近な存在であることが分かります。その上で、夢見る図書館があり、そんな夢を考えられる筆者を育んでくれる図書館と、図書館のある町を大切にしようと呼んでいます。

絵本は、次に本となって、もっと深いおつきあいになっていくのでしょうかね。

小学生B部門

☆☆☆ 金賞（中区選挙管理委員会委員長賞） ☆☆☆

「人間と猫が共存するために」

大鳥小学校 六年 藤本 凜

私たちにあって、身近な動物でペットとしても人気の高い猫ですが、近年では人間の身勝手な事情により野にはなされた「野良猫」を発端とした様々な問題が発生しています。

二〇一八年では、約三万頭の猫が殺処分され、その中の二万頭はまだ子猫でした。野良猫が増えてしまっている主な原因は二つあります。

一つ目は、人間による身勝手なえさやり問題にあります。野良猫にえさをあげすぎてしまうと、他の地域からも野良猫が集まって、そこから繁殖したり、えさの残りから悪臭や害虫が発生します。また、カラスやハトが増加したりと生活環境のバランスを崩すだけでなく、自然環境の汚染を引き起こす可能性があります。

二つ目に、多頭飼育崩壊によって、野良猫問題の拡大に大きな影響をおよぼしています。これは飼い主が適切な飼育をせずに異常繁殖をくり返した結果、飼育不可能になる現象のことです。猫は一度の出産で四〜八頭出産する繁殖能力の強い動物です。飼い主がそのことを知らずに、多頭飼育を行った場合、過剰繁殖によって大量の猫がひどい環境で過ごすこととなります。そして飼いきれなくなり、捨てられた猫たちが様々な問題の発端となってしまうのです。

この野良猫たちを減らすためには、飼い主が適切な飼育を行うことや、地域猫活動を増やすことが大切だと思います。地域猫活動の目的は、「飼い主のいない猫」として放置するのではなく、猫の嫌いな人にも、ある程度許容してもらえぬ「地域猫」として一定の管理をして見守っていくよう、将来的には飼い主のいない猫を減らしていくという事です。地域猫活動は野良猫の不妊手術を行い、エサのやり方などのルールを定めて地域で野良猫を適切に管理する活動を行っています。地域猫活動はTNRといひ、Trap（捕獲すること）・Neuter（不妊手術のこと）・Return（猫を元の場所に戻す）という事です。

私の家でも、不妊手術がされていなかった猫が子猫を産んでしまい、取り残されてしまった一匹の子猫を保護し飼っています。それから猫が大好きになり、猫の保護活動や地域猫について調べるようになりました。

この野良猫問題は、横浜市だけではなく、全国でおこっている一人で多くの人々が問題に関心を持ち、理解し協力することで、問題解決につながると思っています。

私はこのまちをより良くするには、人間や環境だけではなく、動物の命も守っていくかなければいけないと感じます。

ただ、可愛いからと無責任に飼うのではなく、猫の特性を知り、責任や愛情を持って、最後まで大切に飼ってほしいです。

そのことが不幸な猫を増やさないために最も必要なことだと思います。

〈講評〉

より良いまちをつくるために、作者の身近に存在する猫、それも野良猫に注目して作文したことが個性的で良かったです。文章の構成もしっかりしていて、表現力の豊かさが作文全体の格調を高めると共に説得性を増したと思います。作者が自宅で飼っている大好きな猫を通して、社会に目を向け『人間や環境だけでなく、動物の命も守っていくかなければいけない』との主張は、作者が生物の命の大切さを深く感じているからだだと敬服しました。最後に動物を飼う人の心構えの示唆には、作者のまっすぐな力強い心と将来性を感じました。

☆☆☆ 銀賞 ☆☆☆

「健康寿命と社交ダンス」

本町小学校 六年 佐藤 舞音

私の両親は社交ダンスの先生です。私も妹も社交ダンスをやっています。スタジオには2さいから90さいまで様々な年代の受講生が通っています。

私たちが住む横浜市では、文化芸術の創造性を活かした横浜らしいイベントを開き、いしています。それは「ダンスダンスダンス@ヨコハマ」です。

また、横浜市では健康寿命日本一を目指しているそうです。健康寿命とは、健康上の問題で日常生活が制限されることなく、生活できる期間のことです。

私たちが踊っている社交ダンスはこどもだけでなく、高れい者の方々が踊ることを通じて、充実した老後を過ぎて健康寿命を延ばすことができると思います。現にスタジオに通っている高れい者の方々はみんな楽しそうにダンスを踊っています。あまり動けない人もいます。とても上手な人もいます。でも、共通しているのは楽しそうだといいことです。

コロナ禍で引きこもり、足が弱くなり、家族とも友達とも話さず一日をすわったまま過ごすお年寄りが増えたと聞きました。社交ダンスは様々な能力を同時に使っています。リズムをとってステップをし、それを覚えようとしなければいけません。異性の相手と手を取り合って呼吸を合わせて踊ります。

私は横浜に住む高れい者の方が楽しく健康的に過ごすために社交ダンスを楽しんでほしいと考えています。楽しみながら健康づくりを行ない健康的な生活を目指せると思います。

先に書いた「ダンスダンスダンス@ヨコハマ」は3年に1度の開催で、今年も行われませんが、昨年は日本最大級のダンスフェスティバルとなりました。コンセプトのひとつに「あらゆる人にダンスの楽しさを」というものがありました。ダンスのジャンルはもちろん、国せき・ジェンダー・世代や障害の有無をこえて様々な方が参加でき、楽しめるフェスティバルを展開とありました。

私自身もいくつかのイベントに参加しました。5才の時、商店街で大勢の人の前で踊ったこともあります。競技会にも参加しました。その時に印象的だったのは、商店街で踊ったことで様々な年代の人、色々な国の人が拍手をして応援してくれたことです。小さい頃でしたが、とても良くおぼえています。

私は横浜市中区に生まれ住み、両親のスタジオでダンスを踊り高れい者の方々と話したり一緒にダンスを楽しむ機会に恵まれています。スタジオに通ってくる皆さんがいつまでも健康に元気に過ごしてもらいたいと思います。私もダンスを一生けん命練習をしてきつと次に行われるであろう「ダンスダンスダンス@ヨコハマ」では活やくできるようにがんばりたいと思います。

〈講評〉

筆者の社交ダンスの経験から、お年寄りが健康に元気に過ごしてもらいたいという願いが伝わってきました。ダンスのイベントに参加したことやお年寄りと話した経験から書かれており、とても説得力があります。小学生の筆者が「健康寿命」という言葉を知り、その大切さを身近で知ることができたのは、とてもいい経験でしたね。これからも、街の一員として、ダンスの素晴らしさを広め、活躍してくれることを願っています。

☆☆ 銀賞 ☆☆☆

「ヤングケアラ―も一しよにくらす」

横浜雙葉小学校

四年 山岡

こと葉



私の母は、市内でヤングケアラ―の人達が集まる会を開いています。ヤングケアラ―やヤングケアラ―をささえる人が毎月一回集まって、自由に話し合う会です。おいしいカレーライスが出るので、私もよく参加しています。いつもは、みんな楽しそうにしていますが、たまに、悲しそうだったり、おこつたりもしています。

ヤングケアラ―とは、十八才以下で介ごをしている人のことを指します。母は、私が生まれる前後に、私のそう祖父母の介ごをしていました。二人とも、できるだけつねにつきそう必要があり、特別な「とろみ食」作りや薬の用意、着がえやトイレの手伝いなどを、祖母と一しよにしていました。私が生まれてからは、泣いている私をそのままにして二人の世話をしたり、私をおんぶしながらきゆう急車でそう祖父母を病院に運んだりしていたそうです。

とてもつらかったときに、本もくで開かれていた、介ご者の集いに参加しました。

「泣きながらも話すことができて、心が落ち着いて楽になった。」と教えてくれました。ヘルパーさんや竹之丸保育園の先生にもはげましてもらったそうです。だから、ヤングケアラ―や、若いケアラ―が自由に集まって話す場所がほしいと思ったといえます。

あるアンケートでは、二十五人に一人が、「自分はヤングケアラ―だ」と答えました。私はそれを聞いて、クラスの中にもいるのではないかと思いました。そ父母の他にも、兄弟や姉妹に障がいがあったり、親のために日本語や手話で通訳をしたりする子どももいます。平日でも、四く六時間介ごをしていると回答した子どももいるので、夜も介ごをしているのかなと思いました。

私の場合、家に帰ったら習い事や宿題、テレビに時間を使っているので、その時間が介ごになったら、ぜつ望してしまうと思います。介ごが大変で学校を休んだり、宿題がでしなかつたりしても、先生に言えないと思います。はずかしいし、おこられそうだからです。まわりの人がしなないことをしていると知られたくない気持ちになつて、友達にも相談できなないかもしれません。

私は、近くに介ごをしている子どもがいたら、手助けをしたいです。一しよに勉強をしたり、なんでも話を聞いたりできると思っています。

また、「ヤングケアラ―」という言葉をまだ知らない人が多いので、日直のスピーチで話すこともできると思います。日記や作文、詩に表すこともしてみたいです。もしも、先生やまわりの大人が介ごをしていることに気付かずに、宿題をわすれたことなどをおこっていたら、かわりに自分が、その大変さを説明しようと思います。

多くの人が、ヤングケアラ―について理かいをし、助けあえる社会にしていきたいです。

〈講評〉

ヤングケアラ―であるお母さんの体験を聞いて考えた、筆者の真剣な想いがつまった文章でした。「もし、私だったら」と自分に置き換えて考えられるところも良いです。昨今、「ヤングケアラ―」という言葉を聞くようになり、その問題が注目を集めるようになってきましたが、まだまだ、知らない人が多いようにも感じます。これからも、この想いを大切に、誰もが暮らしやすい社会になるよう発信しつづけて欲しいです。

☆☆☆銅賞☆☆☆

「山元町のかっこいい大人たち」

立野小学校 六年 宮崎 圭祐

僕のお父さんは、ボランティアで朝の旗振りをしています。雨の日も風の日も、僕達が安全に学校に行けるよう、毎朝僕よりも先に出かけて行きます。お父さんに直接言ったことはないですが、そんなお父さんを尊敬しています。

しかし上には上がいます。僕の住んでいるマンションは山元町5丁目、町内会は山元町345丁目になります。その町内会のNさんというおじさんがすごいのです。ラジオ体操から子供会や老人会の集まりの、企画から運営までを全てやっているのです。夏祭りではみこしの音頭、町内対抗の運動会では、応援団長になり盛り上げます。年末には夜回りの火の用心もします。

先日山元小学校の前を通ったら、ひまわりが何十本もその通りに植えてありました。お父さんに聞いたら「Nさんが植えたんだよ」と。暑くてあまり外を歩きたくないと思っていたけれど、真つすぐと空に向かって咲いているひまわりを見て、とても清々しい気持ちになりました。

それから二週間ほど経った雨の日に出かけ、駅まで迎えに来てもらい、その通りを車で通ったら、ひまわりはなくなっていて、沢山のペーパーランプがつるされていたのです。雨の日の夕方、そのランプの光がゆらゆらとすぐきれいで、とてもいやされました。家に帰りお父さんに話したら、そのランプもNさんがつけたものでした。

Nさんは山元町に住んでいる全ての人が、楽しく快適に暮らせるよう、毎日色々なことを考えて努力している人なのです。その他にも町内会を支えているNさんの仲間の大人たちが、僕のお父さんを含め沢山います。その人達のおかげで、みんなは安心して楽しく暮らせているのだと思います。

僕も大人になったらNさんやお父さんのように、町内の人達が楽しく暮らせるよう、行動できる人になりたいです。

家族も町も、お互い思い合い助け合って暮らせば、明るくて笑顔のあふれる、よい町になっていくのだと思います。

〈講評〉

自分の住んでいる町にいかっこいい大人について、生き生きと熱い思いが書かれています。仕事ではなく、ボランティアで誰かがよい町づくりを支えてくれていることに気付けたのは見事です。そんな大人たちへの強い憧れや「僕も将来こうなるぞ」という意気込みが伝わってきました。かっこいい大人たちの関わりの中で感じた想いを大切に、よりよい町づくりを支える一人になって欲しいと思います。

☆☆☆ 銅賞 ☆☆☆

「言葉とあいさつの力」

立野小学校 五年 村岡 燦

僕は、言葉とあいさつがよりよいまちをつくるために大切だと思います。では、ま
ちをよくする言葉やあいさつは、どのようなものでしょうか。

僕は、マンションに住んでいますですが同じマンションの住人の方や管理人さん、おそ
うじのおばさんたちは、いつも声をかけてくれます。「いってらっしゃい」や「おかえ
りなさい」、そのほかにも、「今日は暑いね」とか「雨がふってきそうだよ」など僕を
気づかった言葉がともうれしいです。

僕は、言葉かけやあいさつは、小さなことだけれども、その小さなことがだれかを
少しだけ幸せな気持ちにさせたり、何か災害が起きた時に協力し合うことにながっ
たり、「よりよいまち」をみんなで作っていくなかでとても大切な部品のようなもので
はないかと僕は思うのです。

この作文を書く前に内閣府での「地域とのつながり」の調査結果の表を見ましたが、
昭和の時代と比べて現代は、近所付き合いがとても少なくなっているという結果に僕
はおどろきました。

祖母の家に遊びに行くと、今でも、近所の方から果物やお菓子をいただいたり、料
理のおすそ分けをしたり、僕の住んでいるマンションより近所付き合いが多いなあと
感じます。昔から住んでいる人どうしとマンションでは付き合い方の違いがあるのか
もしれません。そして、祖母の家の近所のようなお付き合いは現代では珍しいのかも
しれません。でも、僕はご近所の安心感は今からもずっと大切にしたい方がよいもの
だと思います。

正直なところ僕は、近所の方のあいさつや言葉に少しはさかしさがあったり、どの
ような返事が正しいかよく分からずに返事の声が小さくなってしまいうこともあります。
それでも、笑顔を返してもらおうとほつとほつとして心があたたくなくなります。

知らない人どうしてもマンションの入り口をゆずりあったりちよつとしたおじぎを
したりします。ときには無視されてしまうこともあるけれど、僕はなるべくあいさつ
やできれば気持ちのよい言葉をかけられるように心がけたいです。それが「よりよい
まち」のあたたかさにつながればいいなあと思います。

〈講評〉

言葉とあいさつにはどんな力があるのかを考え、自分の考えをもつことができまし
た。近所の人とあいさつをしたり、あいさつの後に続く少しの会話をしたりした経験
から幸せな気持ちになることや災害時にも協力し合えるということにつながるという
ことに気付くことができました。そして、実際に行動していることへの想いや考えも素
直に正直に書かれていて、実践している姿が目には浮かぶようでした。これからも、あ
いさつを通して人との関わりを豊かに深められると良いですね。

☆☆☆銅賞☆☆☆

「本当のバリアフリーを目指して」

立野小学校 六年 鈴木 太緒

ぼくの住む街には谷間に駅があり、三方の丘に向かい住宅地が広がる坂道や階段が多い地域です。駅から自宅までは、通称「地獄の階段」と呼ばれる長階段が続き、次は高さも幅も定まらない「ガタガタ階段」を下って行きます。近所は古くからの住宅も多く、お年寄りの方もたくさん住んでいます。また、目や耳の不自由な方の施設もあるのです、生徒の人が生活したり、学校に通う姿をよく見かけます。

同居しているおじいちゃんは、

「こういう立地は大変だけど、健康の為に良い運動になるんだよ。」
と言っていました。

近所の九十歳になるおばあちゃんは、「自分の欲しい物は、自分で買いたいよね。」と杖をつきながら、ゆっくりゆっくりガタガタ階段と地獄の階段を通り駅前まで買い物に行きます。お隣の足の不自由なおばさんは、もつと便利な地域に引越してしまいました。盲学校の生徒の人達はたくさん歩く練習をし、難しい階段も注意深く、とても上手に歩くけれど、ぼくはいつも心配です。お年寄りや障害のある人達がもっと楽に歩きやすい道ならいいのと思っています。

横浜の商業施設や区画整理された地域ではバリアフリー化や道路整備もされ、不自由さを感じる事はないでしょう。多くの人々が集まる場所では以前に比べバリアフリー化は進んできました。しかし、本当に必要な人々の所は、バリアフリーになっていないのでしょうか。身近な場所ではその恩恵は受けられていないと感じています。お年寄りや障害のある人達は日々不自由さを感じながら工夫して、生活をしているのです。いまぼくが望むのは、大規模な道路整備ではありません。人が行き交うのも難しい狭い道幅を、少し広げたり、階段を整えスロープを作り、ぐらつく手すりもしっかり丈夫な物になればいいと望んでいます。そうすれば、車椅子でも不自由なく行動する事も出来る上、手すりを使い安心して階段も登れます。この様に、お年寄りや障害のある人々の生活に寄りそい、不自由に耳を傾け、身近な所から変えていくことが、本当のバリアフリーと呼べるのではないのでしょうか。

〈講評〉

筆者の住む町の坂道や階段などの不便さから見たり聞いたりの経験から感じたことや意見が書かれました。そこで出会ったおばあちゃんが言っていた「自分の欲しい物は自分で買いたいよね。」という言葉が心に残りました。自分が便利な町に暮らしたいということではなく、いろいろな人に想いを馳せて考えられる筆者はとても優しいですね。道路整備を実際するとすると、行政上のいろいろな課題はあると思います。筆者のよりよい町にしたいという思いを忘れずに、まずは自分ができることを率先して行っていけるとよいですね。

中学生部門

☆☆金賞（中区明るい選挙推進協議会会長賞）☆☆

「大事な一人一人の意見、一人一人の一票」

仲尾台中学校 一年 清水川 智絵

先月の参議院議員選挙では、両親に付きそって私も投票場に行き、投票の雰囲気味わいました。二〇一六年、公職選挙法が改正され、選挙権年齢が十八歳以上に引き下げられた事を、みなさんは知っていますか。選挙権年齢が引き下がった事により、若い世代の人がより政治に声を届けられるようになり、私も後五年すると、投票する事ができます。

横浜市長選挙の区別投票率を見ると、横浜市の平均が四十九・〇五%、そして一番多かった栄区も、五十二・二二%でした。私はこの数値を見た時、多くてもおおよそ半分しか到達していない事に驚きました。

さらに、中区の年齢層別投票率では、一番多いのが五十代と七十代の五十四と五十七%、一番少ないのが二十代の三十%だそうです。引き下げられた十八歳は、十九歳とあわせて四十七%です。

高齢者の方が投票率が多いと、毎回決まった人になってしまったり、高齢者だけからの視点になり、これから生きる若い人のためでは無くなると思います。投票率が多かった栄区は、高齢の方の割合が若い人よりも多いと聞きました。今後はさらに少子高齢化が進むため、若い人達こそ投票に行かなければ、高齢者のための選挙になってしまふと考えます。

私は、学級目標決めで案を出す時に、しっかりと自分の考えを持っていたのですが、みんなには言えなかった事がありました。学校ではみんなが自分から手を挙げて発言し、意見を言わなければ、全員が良いと思っているのか分からないまま決まってしまう、とよく先生が言っていました。今思い返すと、あの時発言していれば、賛成してくれる人がいたかもしれない、自分の意見になっていたかもしれないと思っています。この事をきっかけに、私はクラスに自分の意見を出し合うためにも、発言するよう心がけています。

同じように、選挙はみんなが投票に行かなければ、全員が良いと思っているか分からないまま、決まってしまうだけでなく、私達の暮らしにも影響します。私達の暮らしや社会全体を良くするためには、選挙に行く事が大事だと考える事ができます。クラスで発言せずに黙っている事と、投票しない事は、クラスに参加しない、また、社会に参加しない事と同じだと思います。色々な事が自分以外の人によって決められていくと、自分が賛成や反対と思った事が反映されず、政治に私達が思っている事を理解されなくなってしまうです。

みなさんも、選挙に行ってみてはどうですか。選挙権が与えられたのなら、政治に私達の意見を一票でも伝える事ができるのです。私も選挙に行けるようになれば、必ず投票しようと思っています。未来をつくるのは、私達なのだから。

〈講評〉

本作品は選挙の状況や最近の投票率について、中区を含め分析し、少子高齢化が進む現在の状況の中で、若い人達の選挙に参加することの重要性を説くと共に自分がクラスで意見を発信しなかったことと選挙を重ね合わせて筆者の思いを素直に表現しています。

また、最後の段落では「みなさんも選挙に行ってみてはどうですか」と問いかけ、「未来を作るのは、私達なのだから」と結び、作品の印象度を高めており、多くの審査員から高い評価がありました。

☆☆☆ 銀賞 ☆☆☆

「選挙で築く私たちの未来」

仲尾台中学校 一年 藤井 菜月

私の前には一本のお茶がある。なんの変哲もない飲み物だ。しかし、当たり前のように存在するこの物体に隠れているのは、日本の農業政策、国会で決められる消費税、それで成り立つ行政サービスなどの日本の政治に大きく関係していることだ。それに気づいたのは七月。五年後に選挙権を持つにも関わらず自分にはあまり関係ないと思っていたある日のことである。

流れ続ける選挙のニュースを眺めていて思ったことは、

「この人たちが言う『より良い社会』ってなんだろう。」

止まることのない少子高齢化、各地で始まりつつある過疎化、他国との領地・貿易問題。そんな課題が飛び交う現代社会で私たちは何を目指し、何をすればよいのか。ために自分の希望を思い浮かべてみた。だれもが同じように生きる喜びをわかち合える世の中にしたいたい。生命の尊さを全員が意識できる社会がいい。考えるところに上のでてきた。その中の「過ごしやすい」という視点で考えていこう。私は小学生の時に税金について学んだ。私たちの教科書は国により税金を使って無償で支給されているし、税金がないと道路は私物化され、橋は壊れたまま。「税」という言葉はスーパーなど、身近な所で耳にする。そんな私たちの生活を支える税金も、国民が選択した政治から成っている。「こうしたい」、「ああしたい」は人によって異なる。そこで自分の希望を形にして届けること、自分の未来を選択することこそが、「選挙」なのだ気づくことができた。

私が選挙と聞いて想像することというと、私の通う学校の生徒会である。入学したてのオリエンテーションで印象に残っているのは

「生徒会は役員のことを指すのではなく、全校生徒も参加しています。なぜなら生徒会は全校生徒により成り立っているからです。」

という言葉だ。私はこれは今回学んだ選挙でも言えることだと思う。私たち国民がいてこそこの国だ。当然、私たちは国の一員であり社会人として自分の意見を一票として託すのだ。多様化する社会の中で、誰一人としてまったく同じ考えを持つ人はいないだろう。だからこそ、自分の未来は自分で決めたい。国の一員として自分にとっての「より良い社会」を様々な価値観から創造し、築き上げていくことができるのだ。

私は五年後、社会人としてこの国をつくっていく。そう思うことができた。そしてこの気づきは自分の未来について考える第一歩になったと思っている。

〈講評〉

「私が選挙と聞いて想像することというと、私の通う学校の生徒会である。」と述べ、身近なことから着目し、「生徒会は全校生徒により成り立っていること。」を認識し、そこからこの国も「私たち国民がいてこそこの国だ。」と考えを深めている。そして、「自分の意見を一票として託し、自分の未来は自分で決めたい。」また、「私は五年後、社会人としてこの国をつくっていく。」と言い切っている。これからの未来を託すことのできる若者の逞しさを感じる作品でした。

☆☆☆ 銀賞 ☆☆☆

「投票率を上げるためには」

仲尾台中学校 一年 村上 ゆりあ

今、日本の投票率は世界で一三九位で五三・六八%です。先進国の中では三八位中、下から五番目の三三位です。その中で中区は、四八・六八%で更に低くなっています。投票率が高い国はなぜ高いのか調べてみました。アメリカは、スーパーマーケットやブール、理髪店、コインランドリーなどに投票箱が設置されているそうです。オーストラリアでは、五人が立候補したのなら、有権者は当選させたい順に、空欄の四角に一から五までの優先順位をつけるそうです。

日本は、二〇一五年に選挙権年齢が二十歳から十八歳に引き下がりました。なぜ十八歳に引き下げたのか調べてみると、それは、高齢者が増えている一方で、若者が減っていてこのため若年者が少なくなっていて、若い世代の意見が国や地方の政治に反映されるように選挙権年齢を引き下げ、より多くの若い人たちが選挙で投票できるようにしたいからだそうです。でも、実際は七十代よりも十代、二十代の方が投票率が低くなっています。十代、二十代の人たちの投票率が低いのは多分、急がしくて選挙会場に行く時間がなかったり、選挙番組が面白くないで見る気になれないからだと思います。

選挙会場に行けない人のために、スマートフォンでも投票できるようにすればいいと思います。スマートフォンで投票できるようにすると、十代、二十代の人でも気軽に投票できると思います。また、選挙番組は私にとっては硬くて暗いイメージがあるので、もう少し若い人が出ていた方が若い人たちも興味を持てると思います。

十代、二十代の次に投票率が低い年代は、八十代です。八十代の人たちは、わざわざ選挙会場に行くのが大変だと思うので、手紙でも投票できるようにしたり、アメリカのようにスーパーマーケットやコンビニなど、生活している中でよく使う場所で投票できるようにしたらいいと思います。

このように、他の国のいいところを参考にしたり、もう少し若者の目線で考えてくれたら、日本の投票率が上がるのではないかと考えます。

私の両親は毎回選挙に行っていて、母は選挙新聞を読み、自分と同じ考えの人や理想的な社会を作ろうとしている人を真剣に考えて見つけているようです。選挙と聞くに難しそうに聞こえるけれど、両親を見ると、自分にもできそうな気がします。なので六年後、私も選挙に行こうと思います。

〈講評〉

「日本の投票率は、先進国の中では三八位中、下から五番目の三三位です。」本当に残念な結果ですね。また、アメリカやオーストラリアなど、世界の選挙の様子や日本の選挙年齢が十八歳に引き下げられたかという理由についても、よく調べています。そのうえで、投票率を上げるために、スマートフォンを活用やスーパーマーケットやコンビニなどの投票等、海外の投票方法の導入など具体的な提案がしっかりとなされている作品でした。

☆☆☆ 銅賞 ☆☆☆

「若年層の投票率について」

仲尾台中学校 一年 加藤 りこ

二〇一五年から日本で十八歳以上から投票ができるようになりました。今、私が注目していることは、十八歳から二十代の投票率の低さです。今回、どのようにしたら十八歳から二十代の投票率が上がるのかを考えてみました。

十八歳から二十代の投票率の低さの理由は、大きく三つあります。一つ目は、十八歳から二十代の年代は他の年代と比べて、社会との接点が少ないことです。人は年を重ね、会社に入ったり、子どもができたりすることで地域や教育の問題を自分の問題として捉え始めます。結果として国や自治体の政治に関心をもち始める傾向にあるといえます。二つ目は、住民票に関する問題です。通常、選挙をする場合、住民票に登録された住所に投票所入場券が送付されます。高校を卒業して県外の大学に進学した学生の多くは、住民票を実家のある市や町から移さないため、帰省しない限り進学先では投票できません。不在者投票といった救済制度はありませんが、選挙管理委員会への書類請求や投票用紙の郵送が必要で、手続きが煩わしいです。結果として徐々に選挙から離れていきます。三つ目は、なじみの薄い選挙に対する心理的抵抗感からです。学生の中には「投票所がどんな所か分からないから行きたくない」という声があります。ある研究では、「最初に一回投票に行った人は二回目以降も行きやすい」という結果が出ました。反対に、「投票に行ったことがない人はずっと行かない傾向にある」と言われています。そのため、学校で選挙の知識を教えるだけではなく、模擬投票のように選挙を実際に体験してもらう機会が必要になります。そして、最も有効な手段は「子連れ投票」です。親が子どもを連れて行った場合、「多くの子どもが大人になった時も投票に行くようになった」という研究結果があるそうです。

また、青森県では、どの選挙区の有権者でも投票できる「共通投票所」を大手ショッピングセンターに設置し、投票率アップにつなげているそうです。これは、青森県選挙管理委員会事務局に大手ショッピングセンターグループが「各店舗を期日前投票所として、貸し出すことに協力したい」という協力申し出があり、そのなかの一つが青森県の平川市のショッピングセンターだったことから、共通投票所の取り組みが始まったのがきっかけだそうです。こうした取り組み等により、買い物ついでに投票できるという利便性のほか、従来の投票所のような堅苦しい雰囲気がなく、気軽に行ける点などが投票率アップの要因になったようです。

各自自治体でいろんな工夫がされていて、若年層の投票率を上げようとしていることが分かりました。それを各自自治体だけでなく、国全体として取り組んでいくのが良いと思います。また、インターネットやスマホのアプリ、コンビニで投票できるようになれば、より投票率も上がると思いました。

〈講評〉

若年層の投票率の低さの理由を三つあげ、一つ目は「社会との接点が少ないこと」、二つ目は「住民票に関する問題」、三つ目は「なじみの薄い選挙に対する心理的抵抗から」と良く調べ考え、解決策についても、「子連れ投票」や「共通投票所」など研究結果など具体的にしっかり述べられています。若年層の投票率を上げるためのヒントとなる情報が豊富な作品でした。

☆☆☆ 銅賞 ☆☆☆

「過去から未来へ紡がれていく選挙のリレー」

大鳥中学校 三年 古庄 龍空

選挙は何の為にあるのだろうか。ふと疑問に思った事が何度かあります。私は選挙は、私達国民の願いを形にする為にあると思います。また、社会の授業で歴史を学習したときに、選挙は年代を重ねて、より多くの国民の願いを形にする為にも何度も規律が変わっていったのだと思います。

選挙というシステムが初めて確立したのは、大日本帝国のときの貴族院、衆議院から成る二院制で衆議院議員を決めるときでした。このときの選挙権は、「直接国税十五円以上納める二十五歳以上の男子」と定められていて、有権者は総人口の1.1%に過ぎませんでした。次に選挙法が改定されたのは、加藤高明が内閣総理大臣を務めていた1925年に成立された普通選挙法で、納税額に関わらず、二十五歳以上の男子全員が有権者の対象となりました。これにより有権者が総人口の19.8%を占めました。その後も、第二次世界大戦後に連合国軍総司令部（GHQ）の指令を受け、婦人参政権が初めて実現し、二十歳以上の男女が全員選挙権をもったり、2016年には18歳以上の男女全員が選挙権をもつ様になりました。

何故選挙法が何度も改定されたのか、特に男子しか対象じゃなかったのに何故男女共に対象になったのか、それは主権が天皇から私達、国民に移ったからだと思います。選挙というシステムが確立して長らく、政治は男が行うもの、女に口出しする権利はない、という考え方が主流だったのが、より多くの「国民」の意見を聞き、よりよい日本を創る為に女性にも選挙権が与えられたのだと考えます。

少しずつ、少しずつより多くの国民の声を聞く為に変化していった選挙法。しかし、若い世代特に二十代、三十代の選挙参加率はあまり高いとは言えないと思います。私は折角昔の人達がよりよい日本を創る為に紡いでくれたバトンを私達が無駄にしているのだろうか、選挙は投票する人が居るから成立するのだと思います。選挙は国民の願いを、意見を形にする場所、託す場所だとも思います。だとしたら、選挙に参加しないという事は、自分自身の意見を放棄する事と等しいのではないのでしょうか。選挙は投票する人が居るからこそ成立します。選挙というシステムはよりよい日本を、私達の願いを、意見を形に出来る場所だと思えます。だからこそ、投票率というのは、どれだけ国民の願いが届いているか、どれだけの方がよりよい日本を創ろうとしているのかを表しているのだと思います。昔の人達が目指したよりよい日本。そのバトンを今生きる私達が受け取って今なお走り続けています。よりよい日本を創る為、一人でも多くの国民が、意見と願いを一票に込めて。選挙は私達国民の意見を聞いてくれます。選挙は私達国民の為にあるのではないのでしょうか。意見は違えど、願いは同じではないのでしょうか。「よりよい日本を創る」少しでも早く実現する為に、意見を一票へと込めよう！

〈講評〉

選挙の歴史についてよく調べられています。そして、その歴史から「私は、せっかく昔の人達が、よりよい日本を創るために紡いでくれたバトンを私達が無駄にしているのだろうか。」と気づき、「よりよい日本を創る。少しでも早く実現するために、意見を一票に込めよう。」と考えを深め、選挙について真摯に向き合う姿勢が感じられる作品でした。

☆☆☆ 銅賞 ☆☆☆

「より生きやすい未来を願って」

仲尾台中学校 一年 小泉 詩花

私は、今13歳であり18歳まであと5年である。つまり、あと5年という短い日々が過ぎると、もう大人で、選挙の投票者ということになる。今では「大人になれば必ず行くから大丈夫。」だと思っているが、実際、今の20代の投票率は小さく、自分もいざ大人になって、行っているのか分からない。だから今日は、そのための選挙の心構えをおきたい。

まず、選挙を知るために、選挙の歴史にふれておきたいと思う。日本で選挙が初まったのは、1890年のこと。投票権をもっていたのは満25才以上の税金を15円以上納める男性に限られていて、全国の1%ほどだった。税金を納める人に、税金の使い道を決める政治家を選ばせるといふ考えだった。しかし、この体制に不満をもった人々により、1945年（戦争終戦後）ついに女性も投票できるようになった。私は、税金を納める人が選挙で政治を決めるのではなく、この社会は、国民一人一人によって支えられているのだから、国民の想いが発信される今の選挙を大事にしていきたいと思った。性別、年齢、宗教など多様性のある社会だからこそ、小さな一票を大切にすることで想いのつまった社会が作り上げられていく。それが平等な選挙の魅力だと感じた。

ところで、平等な選挙を実現するため、実際の選挙ではどのような工夫がされているのか。投票事務をしたことのある母に聞いてみた所、公平性がとても大切にされているそうだ。高齢者や障害者が来た場合、職員二人体制で「代理投票」といって、その人の票を聞いて代筆する。また、障害者のために点字セットも置かれているそうだ。そして、いそがしい仕事の人でも投票できるよう、「期日前投票」と言って、平日でも区役所にて投票ができるなど、多くの工夫があるのだと気づけた。私はこのことから、選挙は人権が尊重されていく機会の第一歩であると思えた。私は18才になったら必ず、投票してみたい。今、私は、憲法九条の改正に反対の意見をもっている。せっかく国民の一人として与えられる一票なのだから、その想いをすなおに伝えたい。

今、中区の年齢別投票率を見ると、二十代は全体の30%と少ない率である。私は若者にも選挙にぜひ興味をもってもらいたいと思う。なぜなら、国民一人一人の想いのこもった選挙は、いずれ国民の意見などを尊重する国へと花を咲かせると私は思う。これを、次の世代を受けもつ若者たちに感じてもらいたいからだ。最後に、今、次の選挙で投票しようかと迷っているあなたに。手に与えられるその一票は、自分からの、社会へのラブレターかもしれない。国民一人一人の多様性が尊重される、より生きやすい未来を願って、投票箱にその一票を入れてみてはいかがですか。

〈講評〉

選挙の歴史を調べることから始まり、選挙では「公平性」がとても大切であること認識し、「選挙は人権が尊重されていく機会の第一歩である。」と考えを深め、「国民一人一人の想いのこもった選挙は、いずれ国民の意見などを尊重する国へと花を咲かせる。」と論じています。この清らかな思いをいつまでも持ち続けてほしいと願う作品でした。

審査をふりかえって

小学生A部門では、広場、公園、図書館、駅、お店、美しい景色など、自分たちのまちにあるお気に入りの場所を、魅力たっぷりに伝えられていました。みなさんの作文を読んだ人は、みなさんの紹介した場所に行ってみたくはなりました。みなさんが、まちを大切に思う気持ちがとてもよく伝わってきました。これからもまちを愛する気持ちを大切にしてください。

小学生B部門では、自分たちの住むまちの課題を見つけ改善策を示したり、まちのために活動している人に注目して自分にもできることを考えたりと、みなさんが自分たちのまちをよりよくしていこうとする姿がひしひしと伝わってきました。まちの一員として、まちの発展のために貢献し、行動しようとする姿勢をこれからも大切にしてください。

中学生部門では、選挙の意義について深く考え、投票率をあげるための策や、政治の課題についての意見を出し、自分たちの未来を自分たちの手でよりよくしていこうとする強い意志を感じました。2016年6月から選挙権年齢が18才以上に引き下げられ、みなさんにとって大切な一票を投じる時期も近づいてきています。そのような中で、自分の意見を発信していこうとするみなさんをととても頼もしく思います。

みなさんの書いた作文を通して、みなさんのまちを愛する心、まちのために貢献しようとする姿勢、よりよい社会を築いていこうとする意志を感じることができました。過去に学び、現在をしっかり見つめ、未来のまちや社会をよりよくしていこうという思いをこれからも大切にしてください。今後のみなさんの活躍を期待しています。



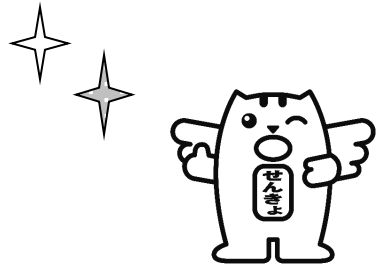
■作品の選考・講評■

横浜市立本牧南小学校教諭	加藤 萌
横浜市立本町小学校教諭	今辻 佐也佳
横浜市立港中学校教諭	縫村 瑞恵
横浜市立港中学校教諭	窪井 素子
横浜市中区明るい選挙推進協議会会長	嘉代 哲也
横浜市中区選挙管理委員会委員長	山中 利弘
横浜市中区長	小林 英二



第42回
中区明るい選挙推進作文コンクール入賞作品集
令和5年1月発行

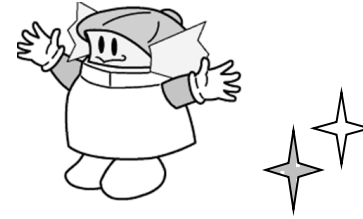
発行
中区明るい選挙推進協議会／中区選挙管理委員会／中区役所
〒231-0021
横浜市中区日本大通35番地
TEL 045-224-8116
FAX 045-224-8109



あか せんきょ
明るい選挙キャラクター
せんきょ
選挙のめいすいくん



よこはましなかく
横浜市中区のマスコット
スウィンギー



よこはましせんきょ
横浜市選挙のマスコット
イコットJr.